⑵ 企　画　展　示

①　石川啄木展　愛と悲しみの歌

期　間　平成24年４月28日㈯～６月24日㈰　52日間

趣　旨　石川啄木（1886～1912）は岩手県に生まれ、盛岡中学時代に文学に目覚め、与謝野鉄幹の主宰する雑誌「明星」の詩人として出発する。上京、帰郷そして北海道への転居を経て、再度、東京での再起をかけるが、肺結核で26年２か月の短い生涯を終える。文壇に認められない失意と貧苦の生活の中で挫折を超えて、その心境を詠んだ三行書きの口語短歌には、「東海の小島の磯の白砂に／われ泣きぬれて／蟹とたはむる」など、現代にも愛唱される名作が多く、独自の鮮烈な詩情に溢れている。100年を越えて今なお読み継がれる作品の魅力と、起伏に富んだ人生を、日本近代文学館の石川啄木資料を中心に紹介する。

（左）チラシ
（右）展示室の様子

編集委員

中　村　　稔　（詩人・日本近代文学館名誉館長）
佐佐木　幸　綱　（歌人）

展示構成

Ⅰ　啄木の生涯
Ⅱ　詩歌の世界

⑶ 特　設　展　示

①　「フランダースの犬　愛と友情の物語」

期　間　平成24年７月21日㈯～８月26日㈰

趣　旨　「フランダースの犬」は、140年前にイギリスの作家ウィーダが書いた少年と老犬の深い絆を描いた物語。貧しい少年ネロが、画家になることを夢見ながら、クリスマスの日、愛犬のパトラッシュとともにルーベンスの絵の前で死を迎えるという印象的な結末は、多くの読者に深い感銘を与え続けてきた。

日本では、明治末から百年以上の翻訳の歴史があり、菊池寛、川端康成、林芙美子など多くの文学者が訳出している。翻訳者には､「お母さん童話」を書いた児童文学者の徳永寿美子（1888～1970　甲府市生まれ)、「赤毛のアン」の翻訳で知られる村岡花子（1893～1968　甲府市生まれ)、言語学者でアンデルセンの翻訳をした矢崎源九郎（1921～1967　南アルプス市生まれ）といった本県出身の文学者も名を連ねる。

本展は、挿絵とともにこの感動の物語と、翻訳の歴史を紹介。また、作品の舞台やルーベンスの絵、原作者ウィダーについてなど、「フランダースの犬」にまつわる解説をご覧いただきながら、夏休み中の小中学生から大人まで楽しんでいただける展覧会となっている。

展　示　資　料　一　覧

加藤朝鳥『黒い馬・少年と犬』（家庭文学名著選）1925（大正14）年５月　春秋社
菊池寛『黒馬物語・フランダースの犬』（小学生全集第26巻）1929（昭和４）年５月　文藝春秋社
関猛『フランダースの犬』（児童図書館叢書）1931（昭和６）年４月　玉川学園出版部
戸野原史朗『フランダースの犬』1932（昭和７）年12月（春陽堂少年文庫72）春陽堂
畠中尚史『フランダースの犬』（岩波少年文庫144）1957（昭和32）年８月　岩波書店
松村達雄『フランダースの犬』1976（昭和51）年８月　玉川大学出版部
「大聖堂に入るテオドシウスをさえぎるアンブロシウス」1784年　山梨市蔵
「ルーベンスの肖像」山梨市蔵
「キリスト昇架（右翼)」1638年　山梨市蔵
前田晁「一人の心は万人の心　文化の根源はここにある」色紙
徳永寿美子「童話とともに四十とせをへにけりただひとすじに」色紙
日高善一（柿軒）『フランダースの犬』1908（明治41）年11月（1911年３月第４版）内外出版協会　日本近代文学館蔵〈パネル〉
宇野浩二『花の首輪』1931（昭和６）年10月　大日本雄弁会講談社
池田宣政『フランダースの犬』(「少女倶楽部」第14巻第９号附録）1936（昭和11）年９月　大日本雄弁会講談社
西山敏夫『フランダースの犬』（講談社の絵本ゴールド版81）1961（昭和36）年12月　講談社
野坂悦子『フランダースの犬』（岩波少年文庫114）2003（平成15）年11月　岩波書店　甲斐市立図書館蔵
松村達雄『フランダースの犬』1992（平成４）年５月（1995年３月第６刷）講談社　甲斐市立図書館蔵
林芙美子『フランダースの犬』（世界の絵本）1950（昭和25）年７月　新潮社
『少年少女世界文学全集』第７巻イギリス編第４巻1959（昭和34）年12月　講談社
藤原一生『フランダースの犬』（母と子の名作文学20）1967（和42）年９月（1970年12月９版）集英社
榊原晃三『フランダースの犬』（子どものための世界文学の森12）1994年３月（1994年７月第２刷）集英社　甲斐市立図書館蔵
前田晁『フランダースの犬』1953（昭和28）年６月　同和春秋社
前田晁『陥穽』（近代西洋文藝叢書第12冊）1916（大正５）年８月　博文館
前田晁『少年国史物語　東京時代』1936（昭和11）年９月　早稲田大学出版部
前田晁『短編十種モウパッサン集』1911（明治44）年２月　博文館
前田晁『童話集　森の梟』1925（大正14）年２月　第一出版協会
『クオレー愛の学校ー』上・下（岩波少年文庫1007.1008）1975（昭和50）年11月　岩波書店
前田晁『聖書物語』上・下　1941（昭和16）年1953年６月　岩波書店
前田晁『少年国史物語　東京時代』原稿
村岡花子『フランダースの犬』2004年６月72刷　新潮社　カバー　安野光雅
村岡花子『フランダースの犬』（カラー版・世界幼年文学22）1968（昭和43）年９月（1971年４月２刷）偕成社

矢崎源九郎『マッチ売りの少女』童話集（Ⅲ）1967（昭和42）年12月（2005年８月40刷）新潮社
矢崎源九郎『人魚の姫』童話集（Ⅰ）1967（昭和42）年12月（2005年４月45刷）新潮社
矢崎源九郎『絵のない絵本』1952（昭和27）年８月（2007年６月10刷）新潮社
矢崎源九郎『民衆の敵』1956（昭和31）年３月　新潮社
矢崎源九郎『王さまとうぐいす』1955（昭和30）年10月　大日本雄弁会講談社
矢崎源九郎『日本の外来語』（岩波新書（青版）518）1964（昭和39）年３月　岩波書店
矢崎源九郎『人形の家・桜の園』（少年読物文庫）1956（昭和31）年７月　同和春秋社
『グリムの昔話』（１）野の道編（２）林の道編（３）森の道編　2000（平成12）年10月～2001年４月　童話館出版
『アンデルセン童話全集』全７巻1954（昭和29）年２月～1955（昭和30）年４月　河出書房
徳永寿美子「フランダースの犬」草稿
徳永寿美子「家なき少女」草稿
矢崎源九郎『フランダースの犬』1961（昭和36）年11月（1975年11月14刷）角川書店
矢崎源九郎　小林冨司夫宛書簡　1954（昭和29）年５月29日消印
矢崎源九郎『ゆかいなヤンくん』（岩波少年文庫118）1956（昭和31）年５月　岩波書店
徳永寿美子『童話　さくら貝』1945（昭和20）年12月　東亜春秋社
徳永寿美子『うさぎのせんたくや』1966（昭和41）年10月　金の星社
徳永寿美子『家なき少女』1974（昭和49）年10月　偕成社
徳永寿美子『小公子』（小学生文庫59）1951（昭和26）年４月　小峰書店
徳永寿美子『一休さん』（講談社の絵本ゴールド版40）1960（昭和35）年７月　講談社
徳永寿美子『おかあさんのおひざ　母と子の童話教室』1953（昭和28）年４月　三十書房
岡信子『フランダースの犬』1997（平成９）年２月　金の星社　甲斐市立図書館蔵
『母をたずねて三千里・フランダースの犬』1980（昭和55）年３月　朝日ソノラマ
『フランダースの犬』2004（平成16）年12月　竹書房
中西隆三『フランダースの犬』2004（平成16）年３月　文溪堂　甲斐市立図書館蔵
田中史子『アニメ　フランダースの犬』1997（平成９）年３月　ポプラ社　甲斐市立図書館蔵
小山真弓『フランダースの犬』2001（平成13）年８月　ぎょうせい　甲斐市立図書館蔵
「フランダースの犬」映画パンフレット1997（平成９）年３月　松竹株式会社事業部
『フランダースの犬』大百科1997（平成９）年　勁文堂
『フランダースの犬／母をたずねて』（少年少女世界の名作１）1968（昭和43）年12月　世界文化社
川端康成『小公子／フランダースの犬』（幼年文学全集９）1961（昭和36）年９月　偕成社〈パネル〉
徳永寿美子『フランダースの犬』（レインボーブックス子ども文学館30）1969（昭和44）年２月　盛光社
村岡花子『ヘレン・ケラー』1950（昭和25）年４月（1988年４月改訂版）偕成社
村岡花子『エステル物語』1946（昭和21）年２月　愛育社
村岡花子『母心随想』1940（昭和15）年６月　同年８月第７版　時代社
村岡花子『母心抄』1942（昭和17）年10月　同年12月再版　西村書店
村岡花子「赤毛のアン」翻訳原稿
村岡花子『赤毛のアン』1953（昭和28）年２月（1954年12月第13版）三笠書房
村岡花子『赤毛のアン』2008（平成20）年２月（同年６月３刷）新潮社
村岡花子『アンの青春』2008（平成20）年２月　新潮社
村岡花子『アンの愛情』2008（平成20）年２月（2009年２月４刷）新潮社
村岡花子『アンの友達』2008（平成20）年２月　新潮社
村岡花子『アンの幸福』2008（平成20）年２月　新潮社
村岡花子『アンの夢の家』2008（平成20）年２月（2009年４月３刷）新潮社
村岡花子『炉辺荘のアン』2008（平成20）年３月　新潮社
村岡花子『アンをめぐる人々』2008（平成20）年３月　新潮社
村岡花子『虹の谷のアン』2008（平成20）年４月（2009年５月２刷）新潮社
村岡花子『アンの娘リラ』2008（平成20）年４月（同年９月２刷）新潮社
村岡花子『赤毛のアン　第５』1957（昭和32）年９月　三笠書房
村岡花子『続赤毛のアン』1954（昭和29）年９月　三笠書房
村岡花子『赤毛のアン　第４』1956（昭和31）年６月　三笠書房
『フランダースの犬』ヴィネットフィギュア　発売元 株式会社ダイブ
『フランダースの犬』ジグソーパズル　500ラージピース「天使の空」株式会社エンスカイ

②　「歿後五十年　飯田蛇笏展」

期　間　平成24年９月29日㈯～11月25日㈰

趣　旨　近代俳句を代表する俳人飯田蛇笏（1885～1962　本名飯田武治　笛吹市境川町生まれ）が亡くなり五十年目を迎える本年、改めてその足跡をふり返り、今日もなお多くの人々に読み継がれている作品の魅力に光をあてていく。
当館が開館以来収集してきた蛇笏の直筆の原稿、書画、書簡、関係著作、写真など約百二十点を展示する。

展示構成　Ⅰ　俳人飯田蛇笏へ
Ⅱ　俳句道を行く
Ⅲ　一天自尊の秋

③「文学館至宝展　よみがえる文豪の素顔」

期　間　平成25年１月14日（月・祝）～３月17日㈰

趣　旨　富士の国やまなし国文祭の開催を記念し、当館で開館以来収蔵してきた文学者の原稿・書簡・書画などの中から選りすぐりの資料を一堂に展示。
夏目漱石・芥川龍之介・樋口一葉・中里介山・井伏鱒二・太宰治・三島由紀夫など日本の文学史に名を残す文学者の数々の名品を御覧いただく。

展　示　資　料　一　覧

樋口一葉　一葉の愛用した短冊ばさみ
一葉旧蔵のしおり
樋口一葉　半井桃水宛書簡　1892（明治25）年秋
樋口一葉　小短冊
樋口一葉「たけくらべ」未定稿「雛鶏」
幸田露伴　真筆版『たけくらべ』序文原稿
樋口一葉「にごりえ」未定稿
樋口一葉「ゆく雲」未定稿
木村荘八「たけくらべ絵巻」画稿控
樋口一葉「寄紅葉恋」詠草断簡　1894（明治27）年11月
なつ（一葉）の「家督相続届」控（則義覚書　巻六）1888（明治21）年２月22日
樋口一葉　雨宮源吉宛書簡　1890（明治23）年７月
樋口一葉　古屋よし宛書簡　1890（明治23）年７月
樋口一葉　古屋家宛書簡　1890（明治23）年10月13日
樋口一葉　古屋家宛書簡　1893（明治26）年５月７日
馬場孤蝶「一葉の住みし町なり夕時雨」軸装
下村為山　画「樋口一葉肖像」額装
馬場孤蝶　編集・校訂『一葉全集』後編　1912（明治45）年５月　博文館
一葉　馬場孤蝶宛書簡　1895（明治28）年９月17日
一葉　馬場孤蝶宛書簡　1896（明治29）年５月30日

夏目漱石　津田青楓「漱石山房図」軸装
夏目漱石　J・Fミレー「鵞鳥を追う少女」模写　額装　水彩

夏目漱石「酒なくて詩なくて月のしづかなり」短冊
夏目漱石　白仁三郎宛書簡　1907（明治40）年３月11日
夏目漱石　白仁三郎宛書簡　1911（明治44）年10月15日
夏目漱石　中村星湖宛書簡　1911（明治44）年７月25日
夏目漱石　松根東洋城宛葉書　1911（明治44）年10月20日消印・22日消印・23日消印
夏目漱石　内田百閒宛簡　1915（大正４）年９月７日
夏目漱石　志賀直哉宛書簡　1914（大正３）年２月２日

正岡子規　正岡子規　財布賛　軸装
正岡子規「裏門の冬田を出る寒さかな」短冊　軸装
正岡子規　高浜虚子宛書簡　1898（明治31）年９月11日
正岡子規　夏目漱石宛書簡　年不明１月６日
正岡子規「寒山落木」巻三　草稿　1894（明治27）年春
正岡子規「承露盤」原稿　1897（明治30）年冬

芥川龍之介　芥川龍之介「臘梅や雪うちすかす枝のたけ」軸装
芥川龍之介「藤の花軒端の苔の老いにけり」軸装
芥川龍之介「新むろの畳すがしみわがをればここだしづ枝の花ぞさきけるここだほづ枝の花ぞさきける」軸装
芥川龍之介「秋ふくる昼ほのぼのと朝顔の花ひらきたりなよ竹のうらに」軸装
芥川龍之介「鼻」草稿
芥川龍之介「鼻」ノート
夏目漱石　久米正雄・芥川龍之介宛書簡　1916（大正５）年８月21日
芥川龍之介「葬儀の記」原稿
第４次「新思潮」第２年第２号　漱石先生追慕号　1917（大正６）年３月
夏目漱石『社会と自分』1915（大正４）年11月　実業之日本社　芥川への献辞本
芥川龍之介「羅生門」関連ノート
芥川龍之介「羅生門」草稿
芥川龍之介「Defence for “Rasho-mon”（羅生門への弁明）」
芥川龍之介『羅生門』1917（大正６）年５月23日　阿蘭陀書房　菊池寛に宛てた献呈本
江口渙　久米正雄宛葉書『羅生門』出版記念会案内状
芥川龍之介　スケッチブック
夏期大学受講者によるプリント「朝陽新報」
芥川龍之介　山梨夏期大学講演メモ　1923（大正12）年８月
芥川龍之介　俳句稿
高浜虚子　芥川龍之介宛書簡　年不明11月30日
芥川龍之介『近代日本文藝読本』縁起　原稿
芥川龍之介『近代日本文藝読本』序　原稿
芥川龍之介・久米正雄　野口真造宛葉書　1916（大正５）年（推定）８月30日消印
芥川龍之介　久米正雄宛葉書　1916（大正５）年１月５日消印
芥川龍之介　久米正雄宛葉書　1916（大正５）年５月１日消印
久米正雄　芥川龍之介宛書簡　1926（大正15）年７月26日消印
芥川龍之介「鵠沼雑記」草稿
芥川龍之介「或阿呆の一生」前書き原稿
芥川龍之介「或阿呆の一生」原稿

谷崎潤一郎　安田靫彦「谷崎潤一郎氏像」額装
谷崎潤一郎「さむければ猫もしはぶきするぞかし妹よこよひは玉子酒せむ」軸装
谷崎潤一郎　芥川龍之介宛書簡　年月日不詳
芥川龍之介　谷崎潤一郎宛書簡　1922（大正11）年（推定）６月４日
谷崎潤一郎「饒舌録」原稿
芥川龍之介「文芸的な、余りに文芸的な」原稿
谷崎潤一郎　根津松子宛書簡　1932（昭和７）年10月24日
谷崎潤一郎　森田松子宛書簡　1937（昭和12）年３月23日
谷崎潤一郎　森田松子宛書簡　1937（昭和12）年３月25日

中里介山　中里介山「一剣倚天毛骨寒」二曲屏風
中里介山　後閑林平宛書簡　年不明12月16日
中里介山　後閑林平宛葉書　1922（大正11）年９月３日
中里介山　後閑林平宛葉書　1923（大正12）年１月１日
中里介山「大菩薩峠　無明の巻」原稿
安岡章太郎「果てもない道中記」原稿
木村荘八「大菩薩地図」額装

井伏鱒二　飯田龍太宛　幸富講寄せ書き　扁額
井伏鱒二「あの山は誰の山だ　どつしりとしたあの山は」軸装
井伏鱒二「幸冨講境川に来る裏で釣る部屋で飲むそれで良い」軸装
井伏鱒二「はなにあらしのたとへもあるぞ　さよならだけが人生だ　花発多風雨　人生足別離」軸装
井伏鱒二「あれは誰の山だ　どつしりとしたあの山は」色紙
井伏鱒二「飯田龍太の釣」原稿
飯田龍太　井伏鱒二宛書簡　1970（昭和45）年３月12日
飯田龍太　井伏鱒二宛書簡　1971（昭和46）年３月２日
釣り竿　わすれね
井伏鱒二　野上照代宛書簡　1983（昭和58）年11月21日消印
井伏鱒二　野上照代宛書簡　1984（昭和59）年10月18日
井伏鱒二　野上照代宛書簡　1985（昭和60）年５月７日消印
井伏鱒二　野上照代宛書簡　1985（昭和60）年８月２日
井伏鱒二　野上照代宛書簡　1985（昭和60）年９月12日消印
井伏鱒二　野上照代宛書簡　1987（昭和62）年３月１日消印
井伏鱒二　絵付け皿
井伏鱒二「二つの話」原稿
井伏鱒二「十一屋の若旦那」原稿

太宰治　写真　太宰治が下宿した甲府市竪町（現・朝日５丁目付近）の寿館
写真　甲府市水門町（現・朝日１丁目）の石原家玄関横で　1939（昭和14）年元旦
太宰治　井伏鱒二宛書簡　1938（昭和13）年８月11日
太宰治　井伏鱒二宛葉書　1938（昭和13）年９月30日消印
太宰治　井伏鱒二宛書簡　1938（昭和13）年10月31日消印
太宰治　高田英之助宛葉書　1939（昭和14）年１月11日消印
太宰治　竹村坦宛葉書　1939（昭和14）年５月26日消印
井伏鱒二　画　太宰治　賛　高田英之助像
写真　御坂峠の太宰治文学碑除幕式　1953（昭和28）年10月31日
井伏鱒二　津島美知子宛書簡　1952（昭和27）年12月１日
太宰治文学碑原稿「富士には月見草がよく似合ふ」
太宰治文学碑完成除幕式案内　津島美知子宛　1953（昭和28）年10月15日
津島美知子　井伏鱒二宛書簡　1953（昭和28）年11月1日
太宰治　熊王徳平宛葉書　1944（昭和19）年９月10日
太宰治　野田宇太郎宛葉書　1945（昭和20）年４月17日
太宰治　青木辰雄宛葉書　1945（昭和20）年10月30日
太宰治　井伏鱒二宛書簡　1945（昭和20）年８月末頃か
太宰治　創作年表
太宰治「ヴィヨンの妻」原稿
太宰治「斜陽」草稿

山本周五郎　写真　横浜の映画館入口にて　1960（昭和35）年頃　撮影　秋山青磁
清水きよし「酔漢とその細君」草稿
清水清「空蝉」草稿
村上幽鬼「染血桜田門外」草稿
清水清「或る男女の話」草稿
徒然兵衛　児童劇「天の出来事」草稿
清水紅情　詩稿

写真　間門園で『季節のない街』を読む周五郎　1962（昭和37）年暮　撮影　秋山青磁
風間完　画「樅ノ木は残った」イメージ画
山本周五郎「季節のない街」草稿
山本周五郎『季節のない街』1962（昭和37）年12月　文藝春秋新社
山本周五郎「おごそかな渇き」原稿

深沢七郎　高橋忠弥　画　深沢七郎『楢山節考』（1957年　中央公論社）装幀原画
深沢七郎「楢山節考」原稿
深沢七郎「楢山節考」草稿
深沢七郎『楢山節考』1957（昭和32）年２月　中央公論社
深沢七郎　川久保正郎宛葉書　1956（昭和31）年10月９日
谷内六郎　画　深沢七郎『笛吹川』（1958年４月　中央公論社）装幀原画
深沢七郎「笛吹川」草稿
深沢七郎『笛吹川』1958（昭和33）年４月　中央公論社
深沢七郎　川久保正郎宛葉書　1957（昭和32）年10月31日
深沢七郎　川久保正郎宛葉書　1960（昭和35）年４月２日
深沢七郎　井伏鱒二宛書簡　1968（昭和43）年３月10日
深沢七郎「井伏先生と共に」原稿
深沢七郎　井伏鱒二宛書簡　1968（昭和43）年９月９日
深沢七郎「盆栽老人とその周辺」原稿
深沢七郎『盆栽老人とその周辺』1973（昭和48）年５月　文藝春秋

三島由紀夫　三島由紀夫　檀一雄宛書簡　1949（昭和24）年６月26日
三島由紀夫　檀一雄宛書簡　1949（昭和24）年12月16日
三島由紀夫　三枝佐枝子宛書簡　1948（昭和23）年10月11日
三島由紀夫　三枝佐枝子宛書簡　1948（昭和23）年12月３日
三島由紀夫　三枝佐枝子宛書簡　1949（昭和24）年２月19日
三島由紀夫　三枝佐枝子宛書簡　1949（昭和24）年４月16日
三島由紀夫「今日残花昨日開」額装
三島由紀夫　三枝佐枝子宛書簡　1951（昭和26）年９月４日
三島由紀夫　三枝佐枝子宛葉書　1953（昭和28）年４月18日
三島由紀夫　三枝佐枝子宛葉書　1953（昭和28）年５月９日
三島由紀夫　坊城俊民宛書簡　1969（昭和44）年３月12日
三島由紀夫　坊城俊民宛書簡　1970（昭和45）年３月
三島由紀夫　坊城俊民宛書簡　1970（昭和45）年11月19日